

美術

土地柄が滲み出る
「やさしさ」あふれるアートの町、那珂川

那

珂川町には、3つの美術館があります。それぞれが違った特徴を持っていますが、ある共通点があるのです。

馬頭広重美術館に収蔵されている「青木コレクション」は、町に寄贈される前、阪神・淡路大震災であやうく消失の憂き目に遭ったため預け先を探していました。そのときに、旧馬頭町で展示会のコーディネートをしていた青木氏のご遺族が、地元ボランティアの方々がとても「やさしく」親身になって接してくれ、大変お世話になったことに感激し、寄贈を決意したというのです。また、いわむらかずお氏は、町の自然の「やさしさ」に惹きつけられて美術館を作ることを決意し、もうひとつの美術館はハンディキャップのある人の芸術活動をサポートしたいという、「やさしさ」がきっかけとなっています。

このように那珂川町の人や自然が育んだ「やさしさ」が、アートを惹きつけていると思えてなりません。



ルーバーと言われる特徴ある屋根が魅力的な外観

いわむらかずお絵本の丘美術館

日本のみならずヨーロッパやアメリカ、アジアなど24カ国もの国々で絵本が翻訳出版され、世界中で愛されている絵本作家のいわむらかずおさんが開設した「いわむらかずお絵本の丘美術館」。

大切な読者である子どもたちに「絵本」と「自然」を同時に楽しんでもらいたいという想いで作られた美術館は、雑木林や草原、田んぼや畑などがある「子どもの森・えほんの丘」が併設され、訪れた人が絵本の舞台となった自然をイメージできる作りになっています。

絵本の原画などの展示のほか、作家自身による「おはなしと朗読会」や、農場やフィールドでのイベントも行われています。



展示室

那珂川町馬頭広重美術館

那珂川町馬頭広重美術館は、栃木県の実業家である故青木藤作氏が収集した、「青木コレクション」が寄贈されたことをきっかけに開館しました。重要文化財クラスと評価される歌川広重の肉筆画をはじめ、歌川派の浮世絵、小林清親を中心とした明治版画など、貴重な作品が収蔵・展示されています。建物の設計は、日本を代表する建築家の隈研吾氏によるもので、『広重の芸術と伝統を表現する落ち着いたある外観』をコンセプトとしたデザインは、町の景観に溶け込みつつも、凛としたシルエットが存在感を主張しています。

広重美術館にはコレクション・建物双方の魅力に惹かれて、日本国内のみならず、世界各国の人々が訪れています。



[写真上] 歌川広重「東海道五拾三次之内 庄野 白雨」
[写真下] 歌川広重「富士十二景 乾 両国橋下」

八溝杉と烏山和紙、芦野石の床が落ち着いたモダンな雰囲気



[写真左] 美術館の建物は風景に溶け込むように高さを抑えており、環境に配慮した設計となっています

[写真上] 絵本や絵はがき、パズルなどのグッズも販売

美術

誰もがアーティスト
里山が美術館

もうひとつの美術館

誰もが表現活動の楽しさを感じることができる場を提供するべく、『みんながアーティスト』『すべてはアート』をコンセプトとして、廃校になった旧小口小学校の校舎を再利用して「もうひとつの美術館」は平成13(2001)年に開設されました。

ハンディキャップのある人たちの芸術活動をサポートしながら、アールブリュット*、アウトサイダーアートを主なテーマに掲げる日本で最初の美術館です。企画展を中心とした展示以外にも、イベント・ワークショップを開催しています。

※「アール・ブリュット」とは、専門的な美術教育を受けていない人が、湧き上がる衝動に従って制作するアートを総称する言葉で、「加工されていない生の芸術」という意味のフランス語「art brut」です。また、英語ではoutsider artと言われています。



木造校舎のぬくもりを生かした展示室(Viewing2023展風景より)



明治大正期に建てられた校舎を利用



ミュージアムショップとカフェも併設



天井、窓、床に歴史と木のやさしさを感じる廊下



小砂里山芸術の森・よろこびの森

～里山とアートとの関係性を提示するアートプロジェクト～



作品名
「林の立木彫刻」(仮)

KEAT*は、全国で50番目の「日本で最も美しい村」に認定された小砂地区を舞台に、芸術表現を通じて地域の魅力を掘り起こすことで、環境とゆるやかに調和する新しい文化の形成を目指しています。

今回(2023年開催)の出品者の一人、松尾ほなみさんの作風は、生木に直接彫刻するスタイルです。きっかけは、新宿の雑踏で見かけた人を林の中に彫ったら面白いのでは?という発想から。「本来、林は定期的な間伐が必要です。ただ費用等の面からなかなかできないのが現状で、この作品は間伐も兼ねており、環境面でも利点があります。見る人に作品を鑑賞するというよりは、この作品を通して日本全国の手入れができていない林に目を向けてもらえれば」と話されています。

畑を耕すように朝から日が暮れるまで、淡々と作るのが好きだという松尾さん。街中の美術館で展示するのととは違った、地元の人が制作過程から見られる生々しさが醍醐味だとその魅力を話してくれました。



制作風景



松尾ほなみさん (彫刻家)

- ・ 武蔵野美術大学造形部彫刻学科 卒業
- ・ 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
- ・ 第1回KEATに出品した「都市の残像」で大賞を受賞



※小砂環境芸術祭(Koisago Environmental Art Triennale)の略



一歩先で読者
への心を届けて

インタビュー Interview

聞き手を惹きつけるコツは、 まず自分が楽しむこと



廣瀬一美さん、嶋崎有子さん、高橋美幸さん、大垣希さん
(元馬頭/茨城県大子) (代表/小口) (馬頭) (小砂)

平成11(1999)年に結成された、おはなしボランティアグループ「たまご」が、令和3(2021)年11月、「第54回全国優良読書グループ表彰」を受賞されました。会の立ち上げ時はメンバーの高橋さんともう一人の2人でしたが、現在は4人で活動されています。

活動は図書館で月1回、未就園児向けに絵本の読み聞かせが主で、他にも小学校の朝の読み聞かせ、中学校、高齢者施設などいろいろな場所で活動しています。

皆さんに読み聞かせの魅力についてお聞きしたところ、廣



エピソードトークに花が咲きます

瀬さんは「子どもたちが真剣に聞いてくれて、おもしろいところは素直に笑う、そんな子どもたちに

元気もらえるのがありがたい」。高橋さんは「子どもたちに本を好きになってもらう、きっかけづくりをしたい。真剣に聞いてくれるのがうれしい」。嶋崎さんは「とにかく(読んでいて)自分が楽しい。自分がおもしろいと思う本を紹介して、全員がおもしろいと思ってくれるわけではないが、でもかまわない。『スキ』とか『キライ』とか気持ちの揺らぎを共有できればいい」。大垣さんは「読み聞かせのライブ感が楽しい。自分が楽しいものを『どう!?!』と出して、それに対する反応が、えもいわれぬ感じでやみつきです」と、皆さんそれぞれに読み聞かせの魅力を話され、自分たちが楽しむと聞き手も楽しんでくれると言います。

それを表す話に、小学校を訪問して、紙芝居の「おおかみ

と七ひきの子やぎ」を読んだときに、子どもたちから「あぶない! 後ろからおおかみ!」と声がかかるほど盛り上がりたり、高齢者施設で紙芝居の「金色夜叉」を読んだときは、あの寛一がお宮を足蹴にする有名なシーンを「ええい、離せ」とのりのりで演じると、おじいちゃん、おばあちゃんがぶりつきになったとか、いかに皆さんが楽しんでやっているかが伝わってきます。

逆に苦勞されている点とは聞くと、お話の最中に親御さんや先生が子どもたちに静かに聞くようにと、注意してしまうのが悩みなのだと言います。絵本に集中して楽しんでいるから立ちあがってしまう子、お話に入り込んで、だんだん姿勢がくずれてしまう子。注意してしまうことで、集中が切れてしまうので、子どもたちの声かけは、ある程度まかせてもらえればとのこと。ただ走り回っているように見える子も、実は耳をずっと傾けていて、急に座り込んで、熱心に聞き始める子もいるようです。

また、おはなし会に来ていた子が大きくなって再会したところ、「たまご」の読み聞かせを聞いて自分もそういった職業につきたいと、今保育士を目指していると言う方がいたり、長く続けているからこそ「おはなしの輪」が広がっていると感じました。

これからも長く活動を続けていきたいと言う皆さん。「うちの子は騒いじゃうからおはなし会に行けないと言うお母さんもうらっしゃいますが、何度も参加するうちに、だんだん落ち着いて聞けるようになるので、気にせず来てほしい」「読み手をしたい人も大歓迎です」と、笑顔で話していました。



おはなし会の様子



お気に入りの本を持ってもらって

左から「タタタタ」、「ごきげんのわるいコックさん」(紙芝居)、「ゴムあたまポンたろう」、「あずきとぎ